

# 当代中国研究——系譜と挑戦

毛 里 和 子

## ★当代中国研究——二つの源流

日本における、当代中国研究\*（社会科学・人文科学）には、二つの源流があります。まず、明治時代以来の東洋学の流れです。二つの学派が東洋学を作ってきました。一つは東京大学東洋史です。東京帝国大学では一九〇四年から東洋学の講座が独立しますが、開いたのは那珂通世教授、白鳥庫吉教授などです。那珂教授の『支那通論』は日本初の啓蒙的通史として評判高く、漢文で書かれ、国際学界でも反響を呼びました。白鳥教授は、研究対象の時間的、空間的広がり、地理学・言語学など科学的手法の採用、南北の対抗で中国史を描く学風など、日本の東洋学の開拓者です。熱烈な皇国思想の持ち主でした。なお漢語では「東洋」はもともと日本を指し、中国学を「東洋学」と呼ぶのは日本が名付け親のようで、その「東洋学」も中国に大きな影響を与え

ました。

もう一つのいわゆる京都学派は、内藤湖南教授（『清朝史通論』）、桑原隲蔵教授（『中等東洋史』）などが先達です。内藤教授は、中国史を四時期に分けて定説を覆し（宋代近世説に世界は驚きました）、日本文化を中国文化の発展上に位置づけるなど大きな足跡を残しました。桑原教授は東西交通史、中国法制史などスケールが大きく、伝統的漢学を越えた東洋学の基礎を作りました。なお、戦前は東大、京大などの他、東亜同文書院（一九〇一年創設）や南満州鉄道株式会社調査部（一九〇七年）、東洋文庫（一九二四年）などが調査研究、資料蒐集、人材養成を担いました。

戦後の中国研究につながる貢献をしたのが、東では津田左右吉教授（『新撰東洋史』）、西では宮崎市定教授（『九品官人法の研究』）です。前者は、東京専門学校（現早稲田大学）を出てから白鳥教授の指導を受け、日本古代史から中国思想史まで広い関心をもち日本文化の優位性を強調しました。他方、京都で桑原教授の学風、内藤教授の宋代近世説を継いだ宮崎教授は、戦後にも大活躍しました。全般に、明治から戦後初期まで日本の東洋学は世界をリードしましたが、宮崎教授の代表作『科挙史』は抜きん

出ていました。

ところが戦後、唯物史観派が学界を制し、満鉄調査部や東亜同文書院などの研究が日本軍の中国支配に協力したものと排撃され、東洋学は姿を消しました。代わってアジアに本格的に参入した米国から地域研究 Area Studies が入り、当代中国研究の第二の源流となります。一九五〇年代末に政治発展論、開発経済学、民俗学などを使い、中国を対象とした地域研究として再スタートします。アジア経済研究所（一九五八年創設）などが研究と人材養成を担います。坂野正高教授（『近代中国政治外交史』）、石川忠雄教授（『中国共産党史研究』）、衛藤瀋吉教授（「中国・二十五年史稿」）が東洋学と米国流地域研究の橋渡しをします。東洋文庫近代中国研究室（市古宙三教授）は史料・文献面で貢献しました。また竹内好教授（『日本人の中国観』）は、中国研究を近代日本への批判的問いかけと位置づけました。

七〇年代から研究生活に入った私は、中兼和津次教授（経済）、加々美光行教授（思想）、天兒慧教授（政治）などとともに戦後第二世代です。かつての東洋学とは無縁に、新生の中国を社会科学的手法で分析することになります。コロンビア大学・スタンフ

オード大学、ミシガン大学などの米国人政治学者から影響を受けました。

### ★日本の当代中国研究の特徴

いま日本には千五百名近い当代中国研究者がいます。うち近世史以後の歴史分野と経済学がパワフルで世界の最前線にあると言えます。次の特徴があります。

第一は、戦略研究としてスタートしたために冷戦後地域研究が理論研究に屈伏してしまつた米国と違って、日本では、実学、臨地研究として根強く残っています。

第二に、「戦前・戦中の失敗」は、日本の中国研究者に贖罪意識を抱かせ、分析に必要な客観的目を曇らせました。また冷戦期中国がソ連陣営に与みしたため、「社会主義」に共鳴する研究者も多く、中国が理想化される傾向もありました。実像の中国を、社会科学・人文科学の方法や枠組みで解剖する研究が主流になるのは、一九八〇年代、中国が改革開放政策をとつてからのことです。

第三に、米国と違って理論指向が弱く、中国の実態の調査、叙述が主流を占め、比較政治学や数量分析での研究は少数です。九〇年代以降、文部科学省の科学研究費な

どを活用した大型研究、組織的研究が多くなり、ミクロな社会現象の共同調査で変化を検証する実証的研究が増えています。それが日本の中国研究の強みです。

### ★グローバル・パワー中国、手に余る中国

中国は、一九八〇年代から三〇年余り年平均一〇%の経済成長で国内政治も国際的地位も激変しました。とくに九〇年代半ばからの変容は世界史上空前と言えます。経済では、二〇一〇年には日本を抜いてGDP(国内総生産)で世界第二位に浮上し、一人当たりGDPは八〇〇〇ドルを超えました。二〇一二年からは習近平総書記を中核とする第五世代(毛沢東が第一世代、鄧小平が第二世代、江沢民が第三世代、胡錦濤が第四世代)がリーダーとなり、世界の一等国へ、「中国の夢」を語っています。

新興の大きな中国に対して、日本世論の関心は二つに分かれます。書店の中国コーナーには、片方で「中国は脅威だ」という赤字が、もう片方で「中国はまもなく崩壊する」という青字が踊っています。落ち着いた、客観的な現代中国論は大変に少ないか、売れないのです。インターネット世論は感情的で、中国への反感を煽るものが飲

迎われます。米国でも中国に親和的か対抗的かで研究者が分かれています。

現代中国は研究対象として厄介です。社会主義、発展途上国、伝統という「三つの内実」が錯綜していること、この四十年あまり、明治維新以来一五〇年の日本の歴史に匹敵する激動を経験していること（圧縮型発展です）、などのため、研究者は変化に追いついていけないのです。「中国は手に余るものになった」と痛感致します。

超先進地帯から最貧困の村まで、中国には「四つの世界」があるようです。トータルな中国を論ずることはもはや無理です。しかも中国の現実には歴史的径路や経験則、経験科学で積み上げられてきた「暗黙の前提」をたえず裏切ります。

### ★パラダイム転換と三つの挑戦

今、多くの研究者が中国研究の新しい突破を模索しています。明清史の黄宗智教授（カリフォルニア大学）は「中国研究のパラダイム危機」を論じました。彼は、中国史および中国は、◆階層化された自然経済と統合された市場、◆市民勢力の発展をともなわない公共領域の拡大と国家によるその独占、◆リベラリズムを伴わない実

定法主義、◆ 市民社会をともなわなない市場化などの「パラドクス」に満ちあふれており、われわれの「暗黙の前提」を疑う必要がある、と言いますが、これは現代中国にも当てはまります。

私は九〇年代後半から現代中国とアジアをめぐる大型共同研究を進めてきました（科学研究費「現代中国の構造変動」など）。これらを通じて当代中国には四つのモデルがありうると提起してきました。

①たとえ「中国的」な面は多くても、方向は民主化と市場化である普通の近代化モデル、②経済発展を通じて民主化を実現した東アジア・モデル、③伝統、儒学的価値への復帰を将来モデルとして描く伝統回帰モデル、④現代中国の諸現象は決定的に固有性をもつとする中国は中国モデル

私自身は②の東アジア・モデルでアプローチしてきました。

さらに、中国分析のための新手法の開発に挑戦してきました。「三つの挑戦」です。

第一の挑戦は「三元構造論」です。現代中国は二項対立で捉えるよりも、三元的にとらえた方が理解しやすいのです。西欧理論では国家・社会、都市・農村など二元論、

二項対立で考えますが、中国では、国家と社会の間に半国家・半社会があり、そのグレイな中間領域が決定的な鍵を握っているのです。労働者と農民の二者の間には、そのどちらでもない「農民工」なる二億五千万の人々がいるのです。いま中国社会の多領域で二元構造から三元構造への変化が観察できます。

第二に、「中国はどこまで中国的か」を考える上でアジア諸国の経験との比較はとも役に立ちます。「中国のアジア化」です。九〇年代まで続いた東南アジアの権威主義体制と今日の中国共産党体制には多くの共通点が見て取れます。

実験ができない社会科学では「比較」が自然科学での「実験」に相当します。比較には、主要対象をより鮮明に浮かび上がらせる、比較を通じて普遍性や概念化に近づくことができる、先行事例を下敷きに対象事例のこれからを考えることができるなど、たくさん効用があるので、

第三の挑戦は、「制度化」にこだわることです。現代中国では政策が変わるわりには制度は変わりません。表面の変化に惑わされず、政策や「緩いルール」の変更が法で確定されたかどうか、制度化がなったかどうかをしつかり見極めるべきなのです。



二〇〇四年の憲法改正で人権保護が入ったのは画期的ですが、五〇年代半ばにできた、党・国家・軍の三位一体体制は超安定型メカニズムとして些かも揺らいでいません。

以上三つの挑戦が成功すれば当代中国の核心に迫れるかも知れないと淡い期待をしています。

### ★日本と中国

尖閣諸島をめぐる衝突（二〇一二年）が引き金になって日中関係が緊張しています。一五年一〇月に開かれた現代中国学会年会は「日本の中国研究を問う」を共通テーマにしました。力関係が変わって両国関係が不安定になっていること、日本の中国研究のプレゼンスが弱くなっていることなどに学会は危機感をもっています。

一九三〇年代～四〇年代前半の侵略の誤りと悲劇を繰り返さないために、よい隣人関係を作るために、中国研究者がやるべきことは数多いと考えます。多くの日本の研究者が客観的な、分析的な中国研究によって、中国との間に穏やかな安定的な関係を作ろうと努力しています。世界遺産ともいえる「東洋学」は戦後いったん消えてしま

いますが、その東洋学の見直しもとても必要な作業です。また、いくつもの顔をもつ中国の分析には中国との共同作業が不可欠です。日本の当代中国研究の活性化、世界への発信を強く願っています。

\* 「当代」で含意するのは二十世紀初頭以降の百年余です。